

6月の読書会は、戦後間もない頃の西欧事情を知る大変有意義な内容で勉強になりましたが、新米の私には発言も中途半端で舌足らずのため、趣旨を十分に伝え得なかったかもしれませので、改めて一部補完の上要旨をまとめました。ご覧いただければ幸いです。

平成16年6月 松戸市 舘 得夫

(発言要旨)

先日札幌で芹沢文学読書会があり、小林茂樹さんに誘われて（私の地元ということもあり）参加させていただきました。

そこで小林さんはイントロ・スピーチの中で、「芹沢先生は神様です」と発言されたため、皆さんびっくりしておりましたが、私も今回のテキストである「西欧の表情」を拝読して、当時日本人がみな自信を失い窮乏生活に耐えている中で、先生が敗戦国の一人として戦勝国である英仏などの各地を訪ねられ、極めて広い範囲にわたって高い目線でその実情をまとめておられるのは、どう見ても神業としか思えない。もしや本当に神様であったのか、或いは『神の微笑』にあるように、神の意志（慧眼、啓示）に言葉を与えられたのか、と考えた次第です。

その理由を以下に簡単に述べてみたいと思います。

この作品に描かれている西欧通信は、世界史の年表で見ると昭和26年のことになりますが、この時期わが国は、まだ敗戦後まる5年を経たばかりで戦争の傷跡は深く人々みな失意・混迷の中にあって様々な事件がつづき、インフレのあとデフレに見舞われ、国民はやっと食べるだけの窮乏生活に耐えていた時でした。

偶々この前の年に朝鮮動乱が勃発、米軍からの朝鮮特需によって経済は徐々に上向き、とくに私はその頃、北海道の炭鉱の町にいたため石炭景気の恩恵を受けて町が活気立ったのを覚えています。それでもまだ米は配給であり、切符を分配所に持って行って小麦粉かパンに換えて食べるような日々でした。

従って誰でも目先の生活のことで精一杯、全てがアメリカ、進駐軍のご意向次第であり、世の中のことはマンホールの底から天井を見上げて遥かに空が見えるだけというように、外国、ヨーロッパはもとより東京のこともよく分らないのが実状でした。

そのような時に先生がヨーロッパ各地を廻り、たった2、3ヶ月の間にロンドンやパリでの服装の変化から人々の生活の様子、人口や教育、財政事情、その他政治・経済・暮らし振りなどをつぶさに観察され、さらにパリ祭のこと、著名な俳優、音楽家、画家などと面談、そして戦時の英雄の消息に因んだ戦争の非情と命運を伝え、一方で、天才ピアニストの日本娘の活躍を喜び、オペラを楽しんでおられる。そしてこの幅広い見聞をもとに、その本質を極めて高い視点で分析、論評されているのはまさに超人的だと思います。

ここで印象的なことを二つ挙げると、一つは当時、講談などで‘花のパリかロンドンか’などと華やかに伝えられていたパリが、実態はかくも地味で、パリ祭も質素、人々は目の前に迫るかもしれない戦争の恐怖を本気で心配している様子で、先生はこれらをリアルに描き、戦争の過ちを訴えておられる。

もう一つは、当時、日本では子たくさんで人口が増え続けている時、学校の先生から、「フランスの女性は子を産まなくて人口が減る一方だ。いまにフランス人が居なくなる。」などと聞いていたが、実はこれは20年も前のことで、この時すでにフランスでは子供が増えていた。その背景に国の産児奨励政策があり、子供の数に応じて多額の補助金がもらえる。ただ、そのために財政負担が過重になり、財政難から組閣ができないでいるという話。今の日本の少子化の悩みを50年前に経験していることです。

日本では今、参院選の最大のテーマが年金問題で、そのキーとなるのもこの少子化なのに、先生方は「OLの産休を増やせ」などとチャチな対策を叫んでいるが、そんな問題でない筈。また、フランスのように補助金をだせば子供が増えるほど単純でもない。

(以下、若干補足しますと)

日本の場合、背景に戦後社会の大きな変化がある。経済環境の激変や戦後教育の影響もあって、個人主義と自由放任の中で即物・拝金主義と快楽指向の風潮が強くなり、また核家族化が進むにつれ人生観、幸福感、先祖や親子関係・家族愛などの考え方が変わってしまった。

そして子供一人を育てる生涯コストとリターンの単純比較計算をやり、その中で親子愛、子育ての喜びの評価を忘れていく。

さらに最近の不況により、企業の合理化のあおりを受け、共働きを強いられて子育ての環境条件が益々悪くなっている。まして社会不安、老後不安、政治不信の現実のなかで、20年、30年先のために今犠牲を払う気持ちを持ってといわれてもなかなか乗れないのが本音でしょう。

したがって、戦後復興の過程で歪んでしまった日本人、日本社会全体の基本に立ち返って、こうした問題を根本的に解決する方策を探り、希薄化した家族意識や日本社会への信頼感を回復するための対策を考えていく視点が求められる。

今芹沢先生がおられたらどう云われるか、と考えた次第です。

先生のこの作品には、一貫して自由、平和への願いと国民の安穏な生活、そのためのよい政治、指導者の必要性、それに芸術、文化への期待が込められています。

そして多くの興味深い多彩なテーマについて、その観察と状況分析は、広い視野でしかも経済的視点でのロジックが基本になっている。曰く、――

・ロンドン、パリで帽子を被らなくなったのは、ただお金が勿体ないからだ。

・フランスで子供が増えたのは補助金がもらえるから。
などと、実に分りやすい。そのほか、中産階級の生活難、諸物価の動向、教育補助と財政難、食費・下宿代と生活変化、スイスの繁栄と産業育成など、経済要因を梃子に論理が展開され、それを極く自然な言葉で説明されている。

文意・内容も豊富で難しい問題を含みながら、すらすら読み易くつい引き込まれていく
芹沢文学の秘密はここにもあるような気がしたものでした。

帰り際に近くの席の方から、マチスのこと、シュールレアリスムのあとの抽象絵画への疑問についても触れて欲しかったと云われて気がつきましたが、絵描きの立場で少し補充させていただきます。

マチスという人は、先生の予想どおりその後4年ほど元気に活躍され、個展や制作などで多くの実績を残しています。ご存知のとおりマチスの特色は、平面（フラット）と単色の画面構成ですが、鮮やかな赤、橙、紫、緑、茶、黄などがよく用いられ、これが恐らく、先生がパリのアパートを訪ねられた時、マチスの色と感じられたものと思われま

す。もともと法律を学んで司法生を目指しながら、健康を害したのを機に画家に転向した人で、30歳代半ばに原色、誇張、遠近法の無視を特徴とするフォーヴ（野獣派）の代表メンバーになって以来、このユニークな原色や平坦な画面が定着したように思います。ただ、野獣派の名に似合わないほど穏やかで知性的、職人肌の画家といわれます。

このフォーヴ、キュビズムからシュールレアリスムまでを新感覚派の表現主義として括られますが、このうち先生が容認されたのは（推測ですが）フォーヴ（またはキュビズム）までだったのかも知れません。マチスは、（若い一時期とはいえ）そのフォーヴの代表であり、この大画家に会えたことは意義深く、感動的だったと思われま

す。というのは、このエッセイの最後の方に「シュールレアリスム以後のアブストラクトに疑問を持つ」とあるように、これら超現実主義や抽象画を含めた現代絵画の流れに受け入れ難いものを感じておられたのではないのでしょうか。私も、これらの怪奇的で極端な誇張の画風や、人為的或いは偶発的な動機に頼る制作手法には、（幼稚な言い方ですが）なにか正攻法でないアンフェアな逃げの意図が感じられて是としないものがあるので同じ気持ちです。

ただ最近自分としては、これまでの写實的作風から次の進展を図るため、省略・強調・デフォルメなどを種々試みつつ、フォーヴの色や平坦描法、抽象的なパターンの繰り返しによる抽象画の手法（色・形自体の持つ表現力を造形的に利用する）を謙虚に理解したいと努力しています。

以 上